



村の駅



川崎ゆきお

「陽が戻りましたなあ。また今日は暑い」

町外れに古い松が何本か植えられており、小さな古墳のような丘になっている。小屋程度の高さで、敷地も狭い。石段を登るとお稲荷さんが祭られているのが見える。

「昨日はよく降りました。涼しくてよかったんですが、暑いならずと暑い方が楽ですよ」

似たような感じの二人の老人が石段の登り口に座って話している。丁度そこに木陰が出来ているためだ。町外れとはいえ、周囲は住宅で埋まりかかっている。昔の村と村の境界線あたりだろう。

「昨日は掛け布団を外して寝たので朝方冷えましたが、今日は窓を閉めて寝たので、朝方暑くて暑くて」

「似たようなものです。私も」

「今日は温度が上がるですよ」

「昨日冷えたので、体が暖まって丁度です」

「いやいや熱中症になりますよ」

そこにもう一人、老人が現れた。この人も似たような感じで、その違いがよく分からない。

三人は挨拶を交わす。常連さんだ。

ここは村の駅で、散歩老人のたまり場になっている。

「たまには上のお稲荷さんに参らないといけないんじゃないかな」

「木村さんちがお世話しているですよ。誰もお参りしないのでね」

「地所持ちの、あの木村さんですか」

「ここも木村さんの地所ですよ」

「そうだったなあ。忘れていました」

「昔は田圃だったんだけど、盛り土をしたらしい」

「子供の頃からあるので、それは知らなかったなあ。元は田圃ですか」

「田圃ならもっと広い。その一部ですな」

「稲荷信仰ですか」

「話は古い。大正の初め頃ですよ」

「それがまだ残っているんだ。じゃ、この松もその頃からあるのかねえ」

「さあ、それは分からないけど……よく枯れるからねえ」

「稲荷信仰ですか。なるほど。マイ稲荷ですなあ」

「昔は農家の庭なんか祭ってましたよ」

「でも、田圃に盛り土をしてまで……って、一寸熱心さが違いますなあ」

「噂によると、下に何か埋めてあるとか」

「え、何を」

「噂ですよ」

「教えてくださいよ」

「それは何か分からない。木村さんも知らないんじゃないですかね」

「じゃ、どうしてそんな噂が立ったのです」

「デマでしょうなあ。根拠のない」

「ほう」

「地所持ちで、羽振りがいいから、妬まれたんでしょうよ」

「でも、村の有力者でしょ」

「それはそれ、これはこれ」

「今の木村さんも知っているのですかな」

「ああ、噂は聞いていると思いますよ」

「掘り起こすことは出来ないでしょうなあ」

「木村さんが、手放さない限りね」

「しかし、それはやめた方がいい」

「どうしてですか」

「だって、休憩場所がなくなるじゃないですか」

「ああ、そうですね」

了